

34 『靈枢』に見える「針」字と「鍼」字

堀江 奨

『素問』と並ぶ中国医学の基本典籍である『靈枢』は、古くは「鍼経」と呼ばれていたことから解るように、特に鍼灸との関わりが深い。ところで現存する『靈枢』の諸版本を通覧すると、重要な文字の一つである「鍼」と「針」の字の混在が諸篇に見られる。

「鍼」について『説文』では「縫う所以なり」として「縫い針」を指すが、これと並んで医療用具「はり」としての用例も古書中には多い。一方、慧琳の『一切経音義』に「鍼は俗に針に作る」とある通り、「針」は「鍼」と正俗の関係にあり、古字書への親字としての収載も、ようやく北宋の『広韻』『集韻』以降のことである。ただし、この両字は書物の中では古くから混用されている。

現行『靈枢』における混在は、古書中に見られる単純

な混用の一例に過ぎないのだろうか。またその検討は、『靈枢』の編集にかかわる事情、例えば本書のパッチワーク的構造や編集時期といったことの解明に資するだろうか。このことは、一度は検討しておかなくてはならない問題であるように思われる。

以上のような観点から、明刊無名氏本『靈枢』を底本に、経文と篇題に於ける「針」字と「鍼」字を調査するとともに、当該箇所を諸版本及び仁和寺本『黄帝内经太素』と対照し、その所出状況について詳しく検討した。

使用版本は次の通り。①元・古林書堂本 ②明・熊宗立本 ③明・呉悌刊本 ④明・趙府居敬堂本 ⑤明・呉勉学本 ⑥明・無名氏本(底本) ⑦明・周曰刊本 ⑧明・道蔵本 ⑨朝鮮活字本 ⑩明・詹林所刊本

明刊無名氏本『靈枢』の経文並びに篇名に見られる「針」又は「鍼」の字は、全八一篇中三四篇、二二〇条文、二六四ヶ所で、このうち「針」は二六〇ヶ所、「鍼」は四ヶ所(第三八篇経文の最初の一ヶ所、第六七篇篇名と、経文の最初の二ヶ所)であった。篇名に「針」又は「鍼」の字が見えるものは五篇あるが、第六七篇以外は「針」

が用いられている。しかし目録では五篇とも、①⑩は「針」に、④⑤は「鍼」に統一されている。

各版本との校勘では、前記版本の④は目録・経文とも「鍼」の字で統一され、⑤は第三八篇の最初の一ヶ所と第六七篇と第七二篇、並びに第七八篇の最初の一ヶ所と「鍼」が使用され、底本では第六七篇の一字は「針」に作るが、他の諸版本では全て「鍼」となっている、などの異同が見られるものの、概ね大きな差異は見られず、版本の検討からは、『靈枢』の「針」と「鍼」の字の混在の意味を見いだすには至らなかった。

『太素』との校勘では、『靈枢』の経文中に見える「針」又は「鍼」二五九字（篇名に見える五字を除く）のうち二四〇字について、『太素』中に対応する箇所が存在した。このうち「針」は一二八ヶ所、「鍼」は一〇二ヶ所であった。『靈枢』の経文で「鍼」に作っている三ヶ所は、『太素』では難読の一ヶ所以外の二ヶ所はいずれも「針」に作っていた。また、『靈枢』の「針」「鍼」字を含む三四篇のうち二九篇は、そのほぼ全体が『太素』の四二の篇と対応している。よって、『靈枢』の

経文を『太素』の篇分けに基づいて区切ることで、『靈枢』における「針」「鍼」の混在の意味が見えてくるのではないかと考えたのであるが、問題となる第三八篇と第六七篇部分においても、何らかの特徴を見出すには至らなかった。

以上の検討から、『靈枢』における「針」「鍼」の混在は、通常見られる混用の一例であり、書物の編集事情などを反映したものではないと判断せざるを得ない。なお『素問』や『太素』と比して、『靈枢』で「針」の文字を使う例が格段に多いということは、その祖本が宋代に成立したと無縁ではないかもしれない。

今後の課題としては、「針」「鍼」に近い用義を持つ「刺」の字が『靈枢』中に約三〇〇ヶ所存在するので、それを含めての調査をしてゆきたい。

(日本鍼灸研究会)